

所蔵品研究：若林奮《100の羨望》について

北谷正雄

はじめに

豊田市美術館は、2002(平成14)年度に、若林奮から101枚のドローイングの寄贈を受けた。それは、ひとまとまりの作品として《100の羨望》と名づけられている。1970年前後に描かれたこれらのドローイングからは、常に奥行きのある空間、ものやその周囲にまとわる空気のような雰囲気伝わってくる。個々のドローイングには、実際に目にしたものを描いたと思わせるものもあれば(図1)、抽象的な思考の内容を表現したようなものもある(図2)。もっとも、具象的なモチーフといっても、それは何か借り物のような印象で、その向こう側に作家の深い思索が透けて見えるようだ。具体的な対象を描くのではなく、自分が彫刻家として思い描く概念上の空間。これらのドローイングには、若林が彫刻を制作するうえで重要と考える要素(奥行きや積み重なり、厚み、あるいは空間そのもの)が散りばめられているようだ。実際、一枚一枚のドローイングの完成度は高く、決して彫刻作品のための下絵というようなものではない。ただ、若林が思索した中身を解き明かそうとするのは容易ではない。本稿では、この《100の羨望》に対する研究の入り口として、この作品の成り立ちについて検討を加えてみることにする。

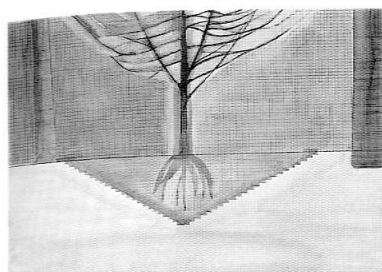


図1
《100の羨望》 77

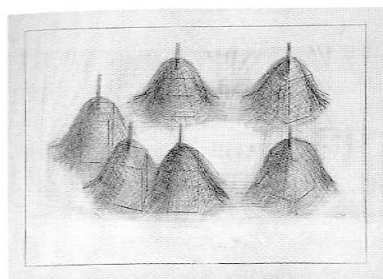


図2
《100の羨望》 40

100という数字

《100の羨望》のドローイングのそれぞれには、1967年から1972年にわたる日付がつけられている。しかし、1967年の日付を持つ5枚は、1971年に再度作家によって手を加えられたと思われる日付が付されているので、実質的には1971年から1972年にかけての1年数ヶ月の間に集中的に描かれたものと捉えてよいであろう。作品の寸法も、平均して縦38cm、横53cm、ちょうど規格のB3版をひと回り大きくしたものにほぼ統一されていて、この《100の羨望》が確かに何らかの意図によってまとめられたものであることがうかがわれる。

ただ、この作品は、タイトルが示すように100枚で完結するものとして描かれたものではないようだ。まず、100という数字が、正確に100枚という意味で使われているのではないことは、この作品が101枚からなっていることから自明である。他にも〈100粒の雨滴〉や〈100線〉など、100という数字がタイトルに使われているものが、若林の作品にはいくつかあるが、当館の所蔵する《100粒の雨滴Ⅰ》は12枚の銅版を積み重ねたものであるし、蓋付の小ぶりの缶に造形物を封じ込めた〈100線〉のシリーズも、100個で1点を形成しているものと、そうでないものが混在している。これらのことから明らかなように、若林がタイトルに用いる100という数字は、正確な数量を表しているということはないとみられる。

また、〈100粒の雨滴〉と〈100線〉では、「100」という数字が持つ意味合いに、互いに

重ならない部分があることも事実である。3点が制作された〈100粒の雨滴〉は、作家が1973年から1年間滞欧した間に、旧石器時代の洞窟壁画を見てまわった経験から制作された。この経験から若林は、独自の空間概念を導き出すのだが、そのきっかけは、洞窟壁画が何世代にもわたって重ね描きされていること、つまりそこには時間の積み重ねがあることを感じ取ったことにある。そして地表を境界面として、旧石器時代と現代との間に積み重なった数万年もの時間の堆積を空間の厚みと意識したことが、若林の言葉に見られる¹。〈100粒の雨滴〉は、旧石器時代から現在までの間に地表に降り注いだ雨、その雨粒に穿たれて数万年分の地層を見せる地表面、いずれにしても、想像すらできないような膨大な時間の積み重ねを思わせる。ここでの「100」という数字は、実感としては把握できないような夥しい数量を表していると言えよう。

一方、〈100線〉はどうか。《100線》《新100線》《エクストラ100線》《新々100線》の4点が制作されたが、100個で完結したものは《新々100線》のみである。これは1995年から1997年までの3年間に集中的に制作されているが、最初に作られた《100線》は1983年から1992年までの10年間に92個、《新100線》は1992年から1996年までの5年間に36個が制作された。しかもそれらは、1992年と1993年の2年間に8個が制作された《エクストラ100線》の例外を除いて、それぞれにつけられた番号(＃1、＃2など)の順に制作されたわけではない。番号を前後させながら、その時々作家の関心を缶に詰め込んだものなのであろう。したがって、〈100線〉における「100」は、「漠然と点数の夥しさを暗示すると同時に、制作しつづける当人にとっても、達成すべき到達点の意味ももっている」と解するのが妥当なようだ²。

〈100粒の雨滴〉と〈100線〉とでは、タイトルに使われている100という数字のもつ意味は、互いに重なり合いながらも、それぞれの間にはずれが生じている。これは1点で独立した作品として制作された〈100粒の雨滴〉と、いくつかの関心事をモチーフに連作として構想された〈100線〉の、その成り立ちの違いがあることはもちろんだが、作品自体が持っている性格の違いから生じる部分も大きい。数万年という気の遠くなるような時間の堆積、その茫漠とした夥しさを表そうとした「100」と、個々の関心事を連ねた多量の構成要素を結びつけるものとしての「100」、それらは概念的な思考を表したものと具体的な制作動機を表したものとも言えよう。

では、《100の羨望》はどうだろうか。作家が思索したであろう内容が描かれた個々のドローイングを束ねるものとしての「100」という数字。それは、先に見たような〈100線〉での使われ方に通じている。また、1984年の個展で《100線》が展示されたときは《100本の地平線》というタイトルがつけられていた³。「羨望」も「地平線」も作家のまなざしが向かう方向を示しているようだし、また、どちらも視野には入るが辿りつけないものを示しているようにも感じられる。「羨望」と「地平線」という言葉から受ける印象の相似は、気に留めておいてもよいのではないか。もっとも、《100の羨望》と《100線》とでは、制作年に10年余りの開きがあり、また制作時期の状況

からして、関連性を云々することは早計であろう。ここでは、「100」という数字の
使われ方を指摘するにとどめたい。

これまで、《100の羨望》の成り立ちを、若林が作品のタイトルに用いる「100」という
数字を手がかりに見てきた。これら101枚のドローイングは、1970年前後の若林が
彫刻の在り方を模索するなかで、いまだ彫刻というものには置き換えられない自身
の思索の内容をかたちに落とし込むために描き始めたもので、相当数のドローイン
グを残すことを自らに課していたのだらう。もちろん、101枚というドローイングの
数をもってしても、当時の若林の思索のすべてを網羅するものではないだろう。だが、
作家本人が101枚のドローイングをひとまとめにしたという意味は見逃せない。と
いうのも、この《100の羨望》は、初めから101枚であったわけではないようなので
ある。

裏面の書き込み

ここで、この101枚について詳細に見てみよう。別表にまとめた一覧は、《100の
羨望》の寄贈を受けたときに作家のスタジオから提供された資料と、その後に当館
でこれらのドローイングを整理、調査したときに得られた情報をもとにまとめたも
のである。「制作年」はスタジオから提供された資料にある日付をもとに、裏面の書き
込みにある日付で確認しながら作成した。「技法、素材」は、スタジオから提供され
たものをそのまま採用している。「寸法」は、スタジオの資料を参照しながらも、当館
での調査時に採寸したものである。「画面上の書き込み」と「裏面の書き込み」は、当
館での調査時に確認できたものを記載している。

裏面右上に書き込みされた「新1」から始まる「新」のついた番号が、1から101までの
通し番号となっているので、これが《100の羨望》のためにつけられた番号であるこ
とはすぐに理解される。この番号は、同じく裏面に書き込みされた日付の早い順に
つけられている。ただ、なかには同じ日付が書き込まれているものも少なくない。
その中で順番をつける基準は不明だが、同じ日付のものの中には日付の後に丸
数字が書かれていて、それらは丸数字の順に並んでいることから、ほかの同じ日付
のものも何らかの基準で順番がつけられているのだらう。全体が日付順に並んでい
ることを考えれば、それらもある程度機械的な並び順であることは想像される。

また、日付が2つ書き込まれているものが全体で21枚ある。冒頭でも触れたように、
1967年と1971年の日付を持つものが5枚あり、4年の間隔があるが、残りは数週間
から長くても5ヶ月である。日付が2つあることについては、若林の彫刻作品を見れば
ある程度理解できる。若林の彫刻作品のタイトルには「1st Stage」、「2nd Stage」な
どと記載されているものがいくつかある。これは、作家が作品を一度完成させた後に、
何らかの理由で、おそらくはその時点での作家の考えに近づけるために、再び手を

